



朝日子だより

社会人編 Vol.19

吉田高校の皆さんへ

世の中には、順風満帆な成功者だけではない。もがきながら、日々を生き抜く者の方が多い。多くの人々がぶつかる迷走や挫折にどう向き合っていくか。これまでの「朝日子だより」とは、違った面から語ります。少しでも皆さんが考えるお役に立てれば幸いです。

荒井 健太（平成8年度 普通科卒）
令和元年度吉田高校同窓会実行委員長（47期）
日本郵便株式会社 塩山郵便局 勤務

私の高校時代

私は高校時代、1年次は高習熟クラス、2・3年次は国立文系クラスで過ごしてきました。

2年生の夏休み明けまで、何も疑問を持たず、まっすぐにより良い進学先に向けて頑張ってきましたが、そんな私に転機が訪れます。先生から生徒会長のオファーを受け、それを引き受けたことです。（小学生の頃からそういった役回りをする事が多く、オファーを受けた時点でクラスの理事をやっていたこともあり、根拠のない自信がありました。）しかし、活動を始めてみると現実には甘くありませんでした。同級生からの反発、生徒会メンバー内での孤立。未熟だった当時の私にはそれを乗り越える術はありませんでした。最終的には、生徒会内で私が孤立する形で最後の活動を終えてしまいました。敗北感だけが、私の心を支配していました。またそれが、その後の人生に大きく横たわることになっていきます。

3年生の2学期、有名私立大学の指定校推薦を考える機会がありましたが、私は迷わず「辞退」しました。実力で合格を勝ち取ることを目指す国立文系クラスの中で、生徒会長として結果を残せなかった自分を、受け入れることができませんでした。しかし辞退後、私の心は揺らいでしまいました。有名大学からの指定校推薦で、早々と進学先を決めていく同級生たち。そうした風潮の中で、受験制度そのものにも疑問を持つようになりました。当時はインターネットもない、情報の少ない時代。進路を決める上で参考となる資料も少なく、私は「偏差値、学歴至上主義への反抗」の波に乗ってしまいました。私と同じように「偏差値、学歴至上主義への反抗」をみせる生徒たちもいましたが、「偏差値、学歴至上主義はよくない。だがそれを変えることができるのは、結局学歴のある人だけだ！」という言葉も多くの人々が受け入れていきました。しかし私は受け入れませんでした（今思えばそれも正しいとは思いますが）。当時の私の結論は「偏差値、学歴至上主義を変えるには、結局一人一人がその価値観を捨てること」というとても青臭い、浅はかなものでした。実際、私はその考えのもと突き進みました。

周りの生徒たちが素直に自分の実力にあった受験、進学をしていく中、自分の学力ランクより下位の大学に進学することを決めました。第一志望としていた国公立大学の試験には行かず、担任の先生には「ダメでした。」とだけ伝えました。担任の先生には「どうするの？」と聞かれましたが、私は迷わず「行きますよ」と伝えました。その時の担任の先生の不思議そうな、そして残念そうな表情を今も覚えています。

大学進学、そしてその後

大学進学後、私は夢であったミュージシャンになるためにバンドを組み、曲作りやライブ活動に励みました。しかしそもそも狭き門。才能も努力も足りず、夢破れてしまいました。大学卒業後、システムエンジニアとして就職しましたが、その後の人生を考え、地元に戻り公務員試験を受けることにしました。

そして地元に戻り、実家で勉強している時、私は初めて大学受験に対する強い後悔の念に襲われました。

「今こうして、何もない自分の価値は、結局中途半端な学歴しかないのかな。」

「自分の実力を出し切って、より高い学歴を持っておけばよかった。」

という学歴に対するこだわりが、その時になって沸いてきてしまったのです。そして高校当時の浅はかな自分の決断を強く後悔しました。さすがにもう一度、大学受験をするという選択肢はなかったため、計画通り公務員試験を受け、郵便局への採用が決まりました。その後採用以来17年、郵便局で働いてきましたが、実感としては「仕事において、学歴はそれほど関係ない」ということです。高卒でも、とても仕事の吸収がよく、要領よく仕事をこなせる人がいる一方、大卒なのに要領が悪く、他の人とうまく仕事を進めていけない人もいます。

一般論になってしまいますが

「知識を使って行動し（ここが重要）、経験に変えた人でなければ仕事ができるようにはならない」

「仕事に求められるのは、周囲と協力して課題を乗り越える力である」

こういうことを日々実感しております。

高校当時は他人の考えを受け入れず、周囲との連携がうまくできなかった私も、人生経験を積む中でようやく一人の人間として、社会で生きていけるようになったのかなと思います。

生徒会長としての答え

さんざん迷走してきた私ですが、高校卒業から22年経って、やっと生徒会長をやってきたことの答えが出ました。それは、同窓会実行委員長をやり遂げたことです。

令和元（2019）年度の吉田高校同窓会は、私たち47期生が年次の担当となる年でした。高校時代生徒会長であった私が実行委員長に任命され、精一杯務めました。大げさな言い方になりますが、私は「高校時代にやり残したこと、できなかったこと」をやりきるために、人生を賭けて同窓会準備に取り組みました。当時の生徒会メンバー、同級生に活動参加を募り、総勢40名の実行委員会メンバーで本番に向けて取り組んで来ました。高校当時仲違いしていた生徒会メンバーや、接点のなかった同級生とも、新たな気持ちで一つのチームとして絆を深めながら一年近く準備を進め、最高の同窓会ができたと思っています。

生徒会長の答えはここにあったんだと実感しました。

私は生徒会長をやって、いろいろ回り道をして、決して成功した人生とは言えなかったけど、結果的に地元に戻って高校時代の仲間と素晴らしい同窓会ができた。

人生で一番腑に落ちた答えかもしれません。実行委員会のメンバーは、同窓会が終わった今も、大切な仲間たちです。

おわりに

今の高校生には、私のように無駄な悩みはないかもしれません。インターネットも普及し、受験や進路に関する情報も溢れています。学歴社会への反抗も、無意味と考えるかもしれません。

そんな無意味な反抗をしてきた(?)私の経験則として言える進路に関する考えとしては、

絶対になりたい職業があり、それになるためにその学校でしか学べないのであれば、迷わずその道を進むのが良いと思います。

しかしそれ以外であれば、自分の実力で行ける最高ランクの大学に行った方がいいと思います。実力とは学力(試験の成績)だけではなく、運動や学校活動を評価されたものだとしても恥じることなく進むべきだと思います。ただ、AOや推薦で進学した人は、一般受験で頑張る同級生のためにも、大学に入ってしっかり努力してほしいと思います。

ぜひ実力を出し切って、少しでも後悔のない人生を歩んでほしいです。

しかし、たとえ自分の目標が叶わなかったとしても、絶望はしないでほしいです。人生にとって、受験が全てではないし、幸せになる道はたくさんあります。

みんな、今いるステージで一生懸命幸せそうに頑張っている。同窓会で22年ぶりに会った同級生の、その後の人生を見た私が言うので間違いのないと思います。

高校時代が、20年後輝いていますように！
今を大切にしてください！

